

高知県梼原町 平成 19 年度小学 5 年生通学合宿 (FINE SCHOOL CAMP)

観察の記録

東京学芸大学教育心理学講座杉森研究室 萩原 遥

1 観察調査に至る経緯

梼原町「小学 5 年生通学合宿 (※FINE SCHOOL CAMP)」への訪問調査は、平成 18 年度にも本プロジェクトの代表である児島邦宏教授がおこなった。しかし、昨年度は教職員を対象とした 11 月 30 日から 31 日のインタビュー形式の調査であった。そこで、中越拓平教育長にご快諾をいただき、今年度は実際の活動現場での児童の発達的变化に重点を置いた観察調査を実施することとなった。

※FINE SCHOOL CAMP の「FINE (元気)」とは Fitness (健康), Independence (自立), Nature (自然), Experience (体験) の頭文字をとっている。

2 FINE SCHOOL CAMP について

2-1 日程

- ①平成 19 年 5 月 27 日から 6 月 1 日 (通学合宿) : 5 泊 6 日
- ②平成 19 年 9 月 27 日 (稲刈り)
- ③平成 19 年 12 月 6 日 (餅つき)

宿泊を伴う活動は 5 月下旬から始まる活動のみだが、全体の計画としては、①5 月の通学合宿 (田植えも含まれる) ②稲刈り ③12 月の収穫祭 (餅つき) の 3 段階にわかれる。筆者は通学合宿の 2 日目の昼から 5 日目の夕方までと稲刈りの計 5 日間観察をおこなった。

2-2 活動場所

- ・梼原町松原地区 (松原小学校・松原ふれあいセンター)

松原小学校は平成 11 年 4 月より休校中である。また、松原地区は梼原の中心部から車で 40 分ほどのところに位置している。

2-3 児童・職員の構成 (通学合宿)

- ・児童 : 梼原小学校 26 名, 越知面小学校 6 名, 四万川小学校 8 名の計 40 名。
- ・職員 : 昼 (8:30 から 17:00) は 9 名から 14 名体制。

夜 (16:30 から 8:30) は 6 名から 7 名体制。

梼原小学校 26 名のうち男子は 15 名, 女子は 11 名。越知面小学校 6 名のうち男子は 2 名, 女子は 4 名。四万川小学校 8 名のうち男子は 3 名, 女子は 5 名。3 つの小学校を混合した, 5 班にわかれた。1 班は男女 4 名ずつ 8 名から成る。班長は各班に男女 1 名ずつの計 2 名。

職員は中越教育長を除いて交互に担当。梼原町教育委員会の職員と各小学校の教員から構成されていた。

2-4 活動の目的

- ・休校中の学校の活用，地域のセンター活用などにより，地域との交流を図る。
- ・共同生活や交流学习をする中で，友情関係を築かせる。
- ・地域の教育力を生かす。
- ・通学しながら合宿所で仲間と共同生活し，その中で基本的な生活習慣や自主性・協調性を育てる。
- ・自分たちが田植えし収穫したもち米を使って，デイサービス時に餅つきをし，地域の高齢者と交流する。

3 FINE SCHOOL CAMP での活動

3-1 活動内容

活動の内容は大きく分けて以下の 6 つに分けられる。

- ①生活体験（宿泊，食事作り，掃除，洗濯等）
- ②自然体験（グリーンアドベンチャー，鳥の巣箱作り，トライダー等）
- ③農業体験（田植え，稲刈り）
- ④その他の体験（わら細工，昔遊び，ゲートボール等）
- ⑤地域との交流（餅つき，ゲーム等）
- ⑥通常授業

3-2 活動スケジュール（通学合宿）

初日と最終日は準備や片付け・掃除，開閉会式がおこなわれ，主な活動は中間の 4 日間に，以下のようなスケジュールでおこなわれた。

- ・起床（6:00）
- ・朝食（7:00 から）
- ・国語か算数の授業（9:00 から 10:00）
- ・午前中の活動（10:00 から 12:00）
- ・昼食（12:00 から）
- ・午後の活動（13:00 から）
- ・チャレンジクッキング（17:00 から）
- ・班長会，班会（21:00 頃）
- ・就寝（21:30）

3-3 実際の活動について

実際の活動の詳細を紹介する。なお，筆者が滞在していたのは，通学合宿での 2 日目（5 月 28 日）の午後から 5 日目（同 31 日）までと，稲刈りがおこなわれた日（9 月 27 日）であったため，記録は基本的にその間のみである。観察にあたっては，班ごとの行動人数（何人ずつにわかれていたか，男女比はどうか，同じ小学校で固まっているかなど），発言（会話への参加人数，量など），役割（まとめ役・黙っている子・活発な子・調整役は何人ずついるか），班長と班員の関係（班長の積極度，班員の班長への協力度，班のまとまり具合など），違う班との係わり合い，先生の児童への関与度などに注意することにした。

I. サイエンス教室（5月28日午前）

・活動内容

中国電力中村支店にて、職員の方からエネルギーの話を聞いたり、静電気の実験や電気カーを作成したりした。

II. 田植え（5月28日午後）

・活動内容

地元の男性の方に説明を受け、一列に並んで田植えをおこなった。ロープを使って整然と植えられるように工夫し、各班でまとまって作業していた。田んぼの稲刈りまでは地元の方に任せ、子どもたちは関与しない。

・観察内容

児童の3分の2から4分の3は田植えの経験者であった。児童の何人かに尋ねても、家族や親戚が農家という児童もあり、1年に1度は田植えをするという子が多かった。ただし、それほど田植えが好きという子はいなかった。また、参加者の多くを占める梶原小学校では1、2年の時に学校で田植えを経験させているということもあり、経験者が多かったとも考えられる。

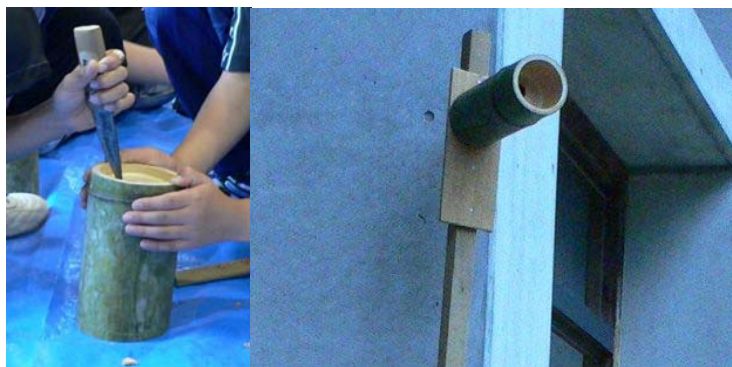
会話に関しては、各人が隣の子と話しながら作業を行っていたため、集団の中で誰が会話に参加して誰が会話に参加していないというようなことはなかった。全体的ににぎやかではあったが、おしゃべりのために手が止まるということはありませんでした。

児童がおのおの作業していたこともあり、役割の区別はできなかった。田んぼの形が正方形ではなく台形であったため児童によって担当する距離が異なり、そのために進行状況に差が生じ、他の班と比べて早く作業が終わってしまう班もあった。その結果、ばらばらになり自由に遊んでしまう子が目立った。自由に遊んでいるときは、同性同士で4から5人の集団を作っていた。

III. 巣箱作り（5月29日午前）

・活動内容

直径15cmほどの竹を、節を残してのこぎりで30cmほど筒状に切り、節に3～5cm程度の巣穴を開け、それを長方形の薄い板に釘で打ちつけ、その板を細長い直方体の木材に釘で打ちつけた。完成したら各班名前やメッセージを書いた。地元の方に木材の切り方などを教わった。各班2つつつ作った。



巣箱作り（左）と完成形（右）

・ 観察内容

はじめ竹を切るのこぎりが 2 本しかなかったため、1 班と 2 班、3 班と 4 班と 5 班でまとまっての作業となる。開始直後は 1 班と 5 班が切っており、切るのも押さえるのも男の子だった。1・2 班は比較的全員がはじめから集まっていたが、5 班は一部の女の子は参加せず、4 班にいたっては班長の児童以外は傍観することすらしていなかった。しかし、先生に促され徐々に全員参加するようになり、切るのも交替で女の子も切るようになった。

途中から 1・3・4 班は男女分かれて作業をするようになった。2・5 班は男女混合で作業していた。男女が分かれている方では、男子の方が終わる時間が早く、終盤は暇をもてあます姿がよく見られるようになった。女の子は比較的苦手な模様だった。

作業に集中していたためか、「押さえて」とか「くぎぬきある？」などの作業に必要な言葉を発することはあっても、それ以外は黙々とやっている時間も長かった。特にそれは男の子に顕著で、女の子は話しながら作業していた。

作業開始時は道具の数の関係から違う班でも共同してやらざるを得なかったが、班ごとにわかれて作業することになってからも 1～2 人ずつ程度他の班の作業を見ている班もあった。

IV. グリーンアドベンチャー（5 月 29 日午後）

・ 活動内容

拠点であるふれあいセンターから山道を歩いていく途中に、木や草に数字の書いたボードが掛けてあり、その番号の木または草が何かを当てていく。山頂までに 14 問、山頂での観察ポイントが 3 つ（あとで 3 問出題されるので観察できることをメモしておく）で計 17 問に回答する。木や草が載っている本を渡されるのでそれを参考にする。

・ 観察内容

あいにくの雨でレインコートを着たり傘を差したりしながらの活動になった。時間差で 1 班から順に出発していき、最後に 5 班が出発する。筆者ははじめ 1 班について 20 分くらいを目安に班から離れて次の班が来るのを待つことを繰り返していった。1 班にはスタートから 20 分程度まで。2 班は 1 班と分かれてから 5 分ほど待ち、そこから 20 分程度。少し待って 3 班は 25 分程度（山頂付近まで）。すぐそこまで 4 班が来ており、そこから 20 分程度（山頂まで）。5 班は山頂の観察ポイントと帰りに観察をおこなった。なお、このグリーンアドベンチャーは各班に先生方は同行せず、児童だけで行動するのが主旨であったため、筆者は児童にはできるだけ関与しないようにしながら観察をおこなった。

全般に積極的に問題に取り組もうとする児童と飽きてしまい集団と離れてしまう児童にわかれてしまうことが多かった。しかし、班長が積極的な班やリーダーシップをとる児童がいる班は比較的まとまって行動していた。中盤から終盤にかけては途中で追いつかれた班の後ろの方の児童と追いついた班の前の方の児童が話してしまうことがあった。しかもそれはほとんど男子であった。山頂付近では前の班と一体化したり追い越したりする班もあった。特に女子にだが、疲れてしまい歩く速度が著しく遅くなる児童もいた。

また、児童数人に話を聞いたところ、山に登ることは少ないという子、登るけど周りを見ない子、山に登るが車を使う子、など環境として周りに林道は豊富にあるものの、自然と触れ合うことが少ない子が多いようであった。活動後の感想文を拝見したところグリー

ンアドベンチャーが楽しかったという児童が多かった。このことからわかるように、児童にとってグリーンアドベンチャーは興味深い活動だったように思われた。

V. ドッジボール大会（5月30日午前）

・活動内容

班対抗戦で、総当りのリーグ戦をおこなった。ゲーム終了時の内野の合計数が一番多かった班を優勝とした。

・観察内容

試合では活発な男子が主に活躍し、体の大きい女の子も比較的活躍していた。試合をしていない班は自由に観戦していたので、班で行動することはなかったが、その分普段の交友関係を垣間見ることができた。

まず男子は3つのグループに分かれた。1つ目は自分が試合をしていないときでもドッジボールに見入っており、玉拾いをする活発な児童3～5人程度のグループで、ほとんどが梶原小の児童であった。残りの2つは少数派である越知面小・四万川小と梶原小の児童数名で、1つは女子数人と話すあるいは1人であるグループで規模はおおよそ3～4人程度、もう1つは男子4～6人程度で集まりドッジボールに関係ない会話をするグループであった。男子の会話の量は比較的多く、集団形成に同じ生活班であることはあまり影響がないようであった。また、集団間での距離は遠く、集団を変える児童は見られなかった。

女子は6～10人くらいの大人数のグループと、男子とも話す2～4人くらいの少人数のグループの2つに分かれた。2つの集団の距離は近いので、グループが違う児童間でも会話は成立しないことはなく、ときどき集団間で移動する児童もいた。基本的に学校が班の形成に影響はないように見えたが、集団には属しているが発言はあまりしない子もおり、その多くは多数派の梶原小以外の子の方であった。

また、男子でドッジボールがいやだという児童は少なかったが、女子は半々かそれ以上がドッジボールに対して消極的であった。また、男子の投げるボールが強すぎるという不満があったため、途中から男子が女子に対して力を加減するようになっていった。

班の対抗戦ではあったが、試合前の集まりや試合中以外で班での行動は少なく、試合前や試合中にリーダーシップをとっていくのは、班長の場合もあったが、ドッジボールに積極的で活発な男子ということもあり、次の試合の班の子をみんなで呼びかけていくことも多かった。ドッジボールに積極的な児童は必ずしも他の活動にも積極的ではなく、リーダーシップを取ろうとするモチベーションは集団のためというよりは個人のためのように思われた。

VI. ふれあい発表の準備・練習（5月30日午後）

・活動内容

最終日に地域の人たちの前で班ごとに発表をおこなうため、そのための準備と練習をした。発表の内容をまず決め、その後練習をおこなった。

・観察内容

内容を決める際、女子が中心となっていることが多かった。各班1～3名ほど積極的に話し合いに参加しない児童もいた。練習では、全員でまとまって練習するところもあれば、

パート別にわかれて練習することもあった。活動4日目の午後ということもあってか、どの班もややまとまりに欠けていた。そのため、翌日時間を取って全体練習をおこなっていた。

VII. わら細工（5月31日午前）

・活動内容

予め地元の方に用意してもらったわらの束を一人ずつもらい、余分な部分をむしるようにとっていった。その後水で洗い、木の棒でたたいて形を整えた。体育館に移動し、各班に一人ずつ地元の方がついて編み方を教わった。

・観察内容

必ずしも班ごとにまとまっていたわけではなかった。近くにいる児童と少し話をするものがあっても、基本的には黙々と作業をしていた。巣箱作りのときは話しながら作業をしていた女子もあまり話しをすることはなかった。筆者もわら細工を体験したが、コツをつかむまでが慣れない人には大変で、作業の内容は少し難しいように感じた。このことが会話の少なさの原因になっているかもしれない。つまり、単純作業であれば話しながらでもできるが、作業の内容が難しいと集中しなければならないため、黙々と作業をせざるを得ない可能性もあるということである。

VIII. トライデー（5月31日午後）

・活動内容

予め希望を取り、トライデー用の班として、松原探検・釣り・ゲートボール/昔遊びの3つにわかれて行動した。1人はわら細工に引き続きふれあいセンターで休んでいた。松原探検は8人（男子3名、女子5名）で、近くの久保谷川沿いの林道（セラピーロード）を歩きながら、植物などを観察した。釣りは11人（男子9名、女子2名）で、久保谷川に釣竿を持って行った。釣った魚はほとんど返したようだ。ゲートボール/昔遊びは20人（男子7名、女子13名）で、ゲートボールと昔遊びで10人ずつに分かれ、前半と後半で交替した。昔遊びは水鉄砲か竹とんぼのどちらかを作った。

・観察内容

松原探検は前に男子3名、後ろに女子5名の2つにわかれていた。お互い声を掛け合うこともあったので、はっきりグループが分かれていたというよりは進む速度の違いによってわかれたと思われる。釣りは男子2名・女子2名のグループと男子7名のグループにわかれていたようだった。ただし、筆者が釣りの現場に終了直前に到着したため、ほとんど観察することはできなかった。ゲートボール/昔遊びでは、先に述べたように時間を半分で区切り、ゲートボールの組と昔遊びの組にわかれて活動をおこなった。筆者は後半の時間に到着したため前半の活動は観察できていない。後半に昔遊びをおこなったグループでは、男子4名が竹とんぼを、女子6名が水鉄砲を作っていた。後半がゲートボールだった方のグループは、ボールの位置によって移動していたため、明確なグループ分けはなかったが、スタートの位置などは仲の良い者同士が同じところから始めており、プレー中もゲートボールに関係のないことも含めて会話は多かった。なお、児童の話では、このグループが前半におこなった昔遊びではみんな水鉄砲を作っていたようだった。

Ⅷ. チャレンジクッキング（5月28日から31日）

・活動内容

チャレンジクッキング（自炊）は2日目から5日目の晩に計4回おこなった。各班1日2000円を目安に4日間で8000円と食費が決められており、自分たちで献立を決めるところから始め、毎日近くの商店に食材を買いに行った。献立は初日に決定した（表1）。たまごなど単品で買えないものや調味料については、教育委員会で購入した。また、ご飯については飯盒で炊いた。ただし、3日目は雨天により児童は飯盒を使わなかった。

表1 5月28日から30日までのチャレンジクッキングでの献立

日付	献立
5月28日	1班 ご飯、卵焼き、味噌汁
	2班 カレーライス、サラダ、フルーツ
	3班 チャーハン、サラダ
	4班 カレーライス、サラダ
	5班 たまごチャーハン、スープ、おにぎり、フルーツ
5月29日	1班 ご飯、そうめん、ソーセージ、餃子の皮のジャム添え、パイナップル
	2班 ご飯、味噌汁、目玉焼きハンバーグ
	3班 カレーライス、フルーツポンチ
	4班 ご飯、卵焼き、たくあん
	5班 カレーライス、サラダ、フルーツ
5月30日	1班 おにぎり、コロッケ、サラダ
	2班 チャーハン、餃子、サラダ
	3班 ご飯、ハンバーグ、じゃがやき、プチトマト
	4班 オムライス、おにぎり
	5班 オムライス、サラダ、味噌汁、りんご

・観察内容

筆者は5日目の夕方で調査を終了したため、最終日のチャレンジクッキングは観察していない。したがって、ここでの観察内容は2日目から4日目までである。

食事は準備が出来次第班ごとに食べ始めることになっており、すべての班の調理が終了するまで待つ必要がなかったため、班の間で準備の速度に差が顕著になった。さまざまな要因があると思われるが、まずは、洗濯が挙げられる。洗濯がチャレンジクッキングと同時並行的に行われたため、役割を分担して、協力体制が整っているところはスムーズに進めることができていた。次の要因は、稼働人数である。料理が得意な児童が、食材を切るのも焼いたり炒めたりするのも一人あるいは小人数でやってしまうことによって、手をこまねく児童が出てくることがしばしばあった。最後に、献立や時間配分も調理の時間に大きく影響していた。たとえばチャーハンを作るのに、ご飯を昼の給食などで余ったものを使った班はすぐに調理が終わったが、飯盒で炊いたご飯を使うことにした班は、他の作業は終わっているのにご飯ができるのを待たなくてはならず、時間が大幅にかかってしまうことがあった。また、コンロの数や水道の蛇口の数に限られていたのに、そのことを考慮に入れず作業をしてしまい、空くの待つ時間を有効に使えないこともあった。この問題は計画を綿密におこない、それに沿ってリーダーシップを取れる児童がいるかどうか、またリーダー以外の班員が協力するかどうかによって違いが生じたように思われる。実際に、リーダーシップを発揮する児童がいても、その児童の意見に反発する児童がいる班や、計

画性を欠くため行動が行き当たりばったりとなり、時間を有効に使えない班は時間がかかっていた。

全体としては、比較的包丁使いに慣れている児童も多く、まったく何をしてよいかわからないような児童は見られなかった。また、活動後の保護者の方の意見で「料理を手伝ってくれるようになった」というコメントが複数見られたことから、結果として複数の児童にとっては今回の経験が料理に対する距離感を縮めたと言えるだろう。

X. 稲刈り（9月27日午後）

・活動内容

田植えのときにお世話になった地元の方が先生となり、児童は鎌の使い方から順に教わった。刈った稲は束にして藁で結び、乾燥させるため稲木に干した。

・観察内容

児童は予定時刻にバスで到着した。車酔いをして具合が悪そうな子も数名いた。通学合宿のときの班で行動するというわけではなく、おのおの好きな友達と作業をしているようだった。数人に稲刈りの経験を聞いたが、経験が多い子もいれば、ほとんど初めてという子もいた。また、夏休みの間にこの地域で自由参加のイベントがあり、そこで顔を合わせていた児童も多かったからなのか、別の小学校の児童とは4ヶ月振りの再開のはずだったが、ほとんど違和感なく溶け込んでいた。しかし、やはり同じ小学校の友だちと作業をしていることが多かった。集団の規模は2から3人や5から6人が多かった。たいていは同性の友達と一緒に作業していたが、少人数の小学校（越知面小や四万川小）の児童は、男女が混ざっていることもあった。

稲刈りでは、刈った稲を束にして藁で結わなければならないところを、刈るだけ刈ってそのままにしていることが多かった。刈る速度も列（集団）によってまちまちで、全員でまとまって行動しているようには感じられなかった。9月下旬にしてはかなり気温が高かったこともあり、時間が経つにつれて疲れを訴える子も多かったが、おおよそ当初の予定通り、2時間強で作業は終了した。

4 インタビュー

通学合宿や稲刈りの翌日に、中越教育長をはじめ教育委員会の方々、松原小学校の吉岡康雄校長に伺った内容をここで紹介する。

4-1 体験活動のあり方とプログラムについて

日程の設定としては、宿泊学習のメインのひとつである田植えができ、尚且つ梅雨に入る前であるこの時期が最適である。翌年度の FINE SCHOOL CAMP のプログラム作成は、反省会を兼ねた校長会でおおよそのガイドラインを作り、3月頃予算が確定したら最終調整して確定する。

また、通学合宿は高知県の他の地域でもおこなわれているものの、宿泊に関しては自由参加というところが多いが、梶原町では宿泊も教育プログラムに必要と判断し、全員参加としている。その背景には後述するように、中学生になってからなじめなくなる問題を解消したいという意図がある。さらに高知県は、不登校児が全国で2番目に多く、通学合宿

以外にもさまざまな年代の不登校児のための活動にも力を入れている。

4-2 地域の協力について

活動場所である松原は高齢の方が多い。この地域の学校が休校になってしまったため、松原の人たちは子どもたちと接する機会がほとんどなく、今回のような宿泊学習を楽しみにいる。このことを、筆者は調査に訪れたときに、地元の方が嬉しそうに児童を見守っていたのを見て実感することができた。田植えやわら細工、昔遊びなど、さまざまな体験に地元の方が講師として積極的に指導されていたが、単に依頼されたからだけではなく、おそらく子どもたちと触れ合う機会が嬉しいから参加したのだろう。

4-3 普段の生活について

今の児童はグリーンアドベンチャーのような経験をあまりしておらず、昔に比べて歩くことが少なく、森へもあまり行かない傾向にある。このことは、悪天候であったとはいえ、グリーンアドベンチャーのあと疲れを訴える児童が多く見られた原因にもなっていると思われる。また、年齢に比して幼い子が増えてきており、年々その傾向が強くなっているようで、通学合宿でも指示しなければならないことや注意しなければならない点が増えて負担になっている。

4-4 教育体制

学校の統廃合は高知でも大きな問題の一つであるが、教員の数を減らさずに、たくさんの先生が児童を見るため、今回のような集団学習を積極的におこなっていく必要がある。また、梶原町は3つの小学校が中学校で1つになるため、なじめずに問題が起きることがあったが、平成11年度からこのFINE SCHOOL CAMPを始め、昨年から低学年・中学年・高学年で学期ごとに集まるようになり、いわゆる中1ギャップはほとんど見られなくなった。加えて、小人数の学校は教員の目が行き届きすぎているので、教員が過保護になりすぎることもある。中学生になり、集団で生活することになるので、小学生のときから集団生活に慣れるための機会が必要である。

4-5 梶原小学校での観察・インタビュー

4-4で紹介した合同学習が低学年（1年生と2年生）でおこなわれており、その様子を観察した。1年生は音楽の時間で、みんなで輪になって歌っていた。2年生は図工で、班ごとに作業をしていた。班は各校が入り混じっていたが、違和感は見られなかった。2年生の2学期の時点ですでにある程度のなじみがあれば、中学校に入っても問題はほとんど起きないだろうと考えられる。校長先生の話では、やはり初対面のときはぎこちなさがあるが、全体の大半を占める梶原小の児童が声をかけるとスムーズになじめるとのこと。

訪問の数日前におこなわれた梶原小の運動会は、全学年で30名程度の学校なので、地域の人が参加する。昨年に梶原小と合併した西川小もかなり小人数の学校であったので、旧西川小の児童の多くは、人数の多い運動会を歓迎している。また、運動会は隣接した幼稚園とも合同でおこなわれ、この幼稚園の園児のほとんどはそのまま梶原小にあがるので、いわゆる小1プロブレム対策も同時におこなえる。

FINE SCHOOL CAMP ではできるだけ児童の自主性を尊重した活動プログラムを組んでいるが、まだやらされている部分が多いと校長先生は感じられており、普段学校にいるときから、いかに自主的に物事に取り組む力をつけさせるかがポイントであるようだ。

5 その他の所見

5-1 班以外でのグループについて

自由時間などを共に過ごす、いわゆる仲良しグループは、決められた班とは異なったメンバーであり、その多くが2から3人、もしくは5から6人程度で、同じ小学校の同性で構成されることが多かった。特に全体の半分以上を占める梶原小学校に顕著であった。越知面小学校や四万川小学校の児童は人数が少ないこともあり、男女混合で同じ小学校の児童とグループを作る場合や、他は全員梶原小の児童というグループに入る場合があった。通学合宿を通して構成員の変化はあまり見られなかった。しかし、小学校間での対立は見られず、班での活動でも所属小学校の違いによる影響はほとんど見られなかった。

5-2 飯盒の担当について

チャレンジクッキングにおいて、飯盒を担当する児童は男子がほとんどだった。筆者は以前にもキャンプなど自炊を含む活動の観察をおこなったことがあるが、大抵の場合、やはり飯盒は男子が担当することが多い。理由として、飯盒を使ってご飯を炊いた経験があるのは男子の方が多い、男子は火おこしが好き、あるいは女子は包丁使いが得意で、しゃべりながら作業をするのを好むため孤独な作業の飯盒は敬遠する傾向にあり、必然的に飯盒は男子が担当になる、などいくつか思い当たることはあるが、筆者自身で実証的には確認しておらず、今回の調査でも客観的なデータを取ることができなかったため、今後の課題としたい。

5-3 観察における問題点

3-3「実際の活動と所見」で述べたが、観察に際していくつかのポイントに注目し調査をおこなったが、調査員が筆者1名であったこと、児童がどの班に属しているかが非常にわかりづらかったことなどから、行動を数値化して客観的事実を見出すことは非常に困難であり、できなかったのが反省点である。今後の課題として、1班に1人の調査員が付いて細かく観察する必要があると言える。

6. まとめ

梶原町 FINE SCHOOL CAMP では教育委員会が主導というメリットを生かし、中1ギャップの問題や過疎地域の活性化などさまざまな問題に取り組んでおり、成果もあげている。現状に満足することなく、平成19年度は6年振りに授業の時間を復活させるなど、プログラムには常に見直しを図っており、児童・生徒、保護者や教員、自然環境などさまざまな側面において変化がある中、試行錯誤しながら積極的に問題に取り組み、活動を数年に渡り続けている点は、非常に価値が高いと筆者は考える。一方で、複数の保護者が指摘していたトイレなど設備の問題や、縦断的にこの体験をどう生かしていくのか、あるいはどのように教科との関連付けをおこなっていくのかなど、いくつかの課題もあるだろう。